

編集後記

記念すべき『社会と倫理』第30号は、折しも21世紀初頭における社会倫理研究所の立役者マイケル・シーゲル氏の退職記念号となった。そのような次第だから、まずは、シーゲル氏のことを少し述べさせていただこうと思う。

シーゲル氏は、社会倫理研究所における「公正と平和」研究プロジェクト、および、「ガバナンスと環境問題」研究プロジェクトの二大プロジェクトを牽引し、いわば研究所のエンジンの役割を果たしてきたと言っても過言ではない。これらのプロジェクトでは、国内外の共同研究者たちとともに、ワークショップの開催、アジェンダ・パンフレットの刊行、論文集の出版などが実施され、それによって、一つのテーマに取り組むための社会倫理研究所独自の共同研究メソッドが確立した。社会倫理研究所へのシーゲル氏の貢献の大きさは計り知れない。

シーゲル氏自身の共同研究のスタイルは、常に問題探索型である。ゴールがはっきりと見えない段階から走り出し、共同研究者を巻き込みながら、次第に問題の輪郭を浮き彫りにしていく。共同研究者は、領域を問わず、また、時に実践者も含めて選ばれ、彼らには、専門性や当事者性を踏まえた上でそこから少し踏み出した結論を目指すべく、厚いコミットメントが求められる。私自身も、最も距離の近い伴走者として10年以上にわたりシーゲル氏の仕事に関わり続けてきた。そのなかで、時に、シーゲル氏の飽くなき探究心と行動力、柔軟な思考力と知的包容力に深い敬意を覚え、また時に、その巧みな話芸でウィットに富んだ小話に爆笑させられ（時に、その巻き込み力と馬力に振り回されて泣かされもし）ながら、様々なことを学ばせていただいた。こうして退職記念論集を刊行する時が来てしまったことに深い感慨を覚えずにはいられない。

シーゲル氏が取り組んできた研究テーマは、平和と環境を主軸とした、広い射程をもつ「和解」の問題である。国際平和の問題や環境問題への対応について考察する際にシーゲル氏が様々な仕方で拠り所とするのは、カトリック社会倫理の思想

に支えられた、人と人との和解であった。そこで、今号では、「社会倫理の射程」と題する特集を組むこととなった。主たる寄稿者は、社会倫理研究所の第一種研究所員（原稿依頼時点）と第二種研究所員である。また、非常勤研究員の中から、かつて研究所スタッフとしてシーゲル氏とともに仕事をした小林傳司氏（元所長、現在大阪大学教授）と山田秀氏（元第一種研究所員、現在熊本大学教授）にご寄稿いただいた。論考のテーマは、環境に関わるもの（籠橋氏、石川氏、杉原氏）、国際政治に関わるもの（大庭氏、山田哲也氏）、少年や家族、共同善に関わるもの（丸山氏、奥田、山田秀氏、坂下氏）、哲学と科学に関わるもの（鈴木真氏、鈴木貴之氏）、教育と学問に関わるもの（林氏、小林氏）と多岐にわたっており、まさに、シーゲル氏の関心の射程の幅広さを特集全体として体現したものとなった。ご寄稿下さった方々に感謝申し上げたい。

社会倫理の基礎では、道徳心理学の基礎となる「規範の心理学」に関する海外の重要論文を掲載した。今回は、最近の英語圏で出された論文の中で、社会倫理に関わる読まれるべき文献を推薦してほしいという要望を、編集側が、英米の哲学に通じた薄井尚樹氏に出して、その選定と翻訳をお願いすることになった。次号以降も、言語圏にかかわらず、読まれるべき重要論文の翻訳を掲載していきたいと考えている。

また、今号では、8本の書評を収録することができた。国際政治、環境経済史、教育哲学、公衆衛生倫理、生命倫理、リスク論などに関する研究書に対して、それぞれのテーマについて一線活躍する研究者の方々に書評をご寄稿いただいた。とりわけ、鷺田清一氏の著書に対する菊地氏の書評については、著者の鷺田氏自身からの応答を掲載することができ、充実したものとなっている。

2015年10月より社会倫理研究所は新たなスタッフを迎えて再始動した。次号では、豪華3本の特集をお届けすべく、現在企画が進行中である。乞うご期待。

奥田太郎